

6-使ったことがある (はい、いいえ)

7-問題なく使える (はい、いいえ)。

25- 当テーマによるアクティビティーに参加の有無

①はい

②いいえ

③分からない

④その他： _____

(はいの場合：

1-学校の先生による講演会

2-学校の先生による授業

3-他人のよる講演会

4-他人による授業

5-他人によるワークショップ

6-学校外でのイベント

7-テレビ

8-その他： _____

26- 当テーマによるアクティビティーに参加希望：

①はい

②いいえ

③分からない

④その他： _____

(はいの場合：

1-講演会

2-学校の授業

3-ワークショップ (楽しく)

4-テレビ

5-イベント

6-その他： _____

若者に対する HIV 予防介入に関する研究

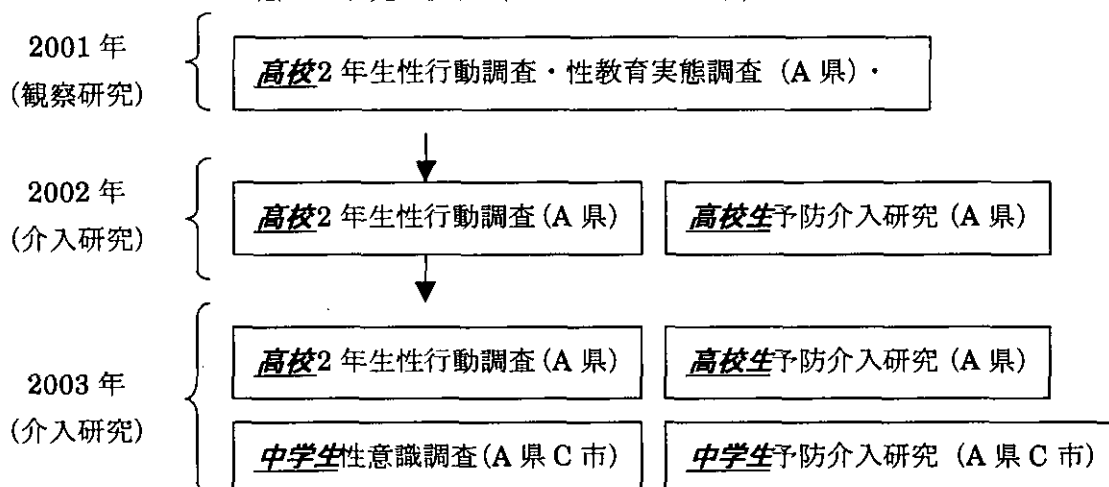
研究代表者：木原 雅子	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野
グループ員：木原 正博	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野
Sh. Mortazavi	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野
本間 隆之	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野
山崎 浩司	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野
木原 彩	法政大学経済学部
国友 隆一	ベストサービス研究センター
小松 隆一	国立社会保障人口問題研究所
市川 誠一	名古屋市立大学大学院看護学研究科感染予防学

◆研究の背景・目的とこれまでの研究の流れ

厚生労働省のエイズ発生動向調査および厚生労働省性感染症研究班の報告によると、1990年代半ば以降、10～20代の若者を中心に HIV や性器クラミジア感染症および淋菌感染症が急速な増加を始め、さらに10代女性（15～19歳）の人工妊娠中絶率も急速な増加を示している。特に中絶率の急増は一部都会に限らず、日本全国すべての都道府県に共通する現象として観察されており、若者における性の問題が広く日本全域に浸透している様子が伺われる。

このような状況の中、本研究グループでは、地方の高校生・中学生の HIV/STD 予防教育について、コミュニティーベース及び学校ベースの予防介入のエビデンスを蓄積する中で、その地域の条件下で実施可能な予防モデルを開発し普及することを主な目的として研究を実施した。若者に対する性の健康向上を目指す今回のプロジェクトを以下 WYSH プロジェクトと呼ぶ（WYSH=Well-being of Youth in Sexual Health）。

図1. 研究の流れ（WYSHプロジェクト）



本プロジェクトの研究の流れを図1に示す。研究は、西日本において行われたが、A県では、10代女性の人工妊娠中絶率は1995年以降急増をはじめ、また、A県内の産婦人科を受診する妊婦・非妊婦のクラミジア抗原陽性率は全国平均を大きく上回るなど、A県の若者の性の実態は憂慮すべき状況に置かれている。2001年には、これらの現象の背景となるA県の高校生の性行動とA県内の小・中・高における性教育の実態調査を実施した。その結果、A県の高校生の性行動は他県と同じように活発であるにもかかわらず、コンドーム使用率は他県よりも低く、自分の身体を守るための予防教育も他県に比べ不十分であることが示唆された。2002年には、A県保健行政機関およびA県全域の高等学校との協働で、A県高校生の性行動調査と予防介入研究を実施し、マルチレベルの予防介入により、高校生（2年生）のエイズ/STD関連知識・予防意識・予防行動の上昇させることに成功した。

今年度（2003年度）は、A県内全保健所と希望高等学校との協働により、高校2年生に対する性行動調査と予防介入研究（A県高校生に対するHIV予防介入研究：WYSH高校生プロジェクト）を継続実施した。加えて、今年度は高校生のみならず、A県内C市（政令都市）で、C市保健所およびC市教育委員会との協働で、C市内の全中学生に対する性意識調査と予防介入研究を（C市中学生に対するHIV予防介入研究：WYSH中学生プロジェクト）実施したが、全市規模での中学生の調査研究は、これがわが国で最初である。

◆研究の基本構造

「研究の枠組み」：ソーシャルマーケティングをプログラムの枠組みとし、個人と環境の変容を目指す。

個人：知識・意識・行動の変容

環境：社会規範、人間関係、物/サービスの供給、セカンドオーディエンスの知識・意識・行動の変容

① **形成調査**：質的調査と量的調査の併用。

（1）質的調査（主にフォーカスグループインタビューを使用、質的分析）。

（2）量的調査（質問紙調査、統計分析）

② **介入企画（多段階）**：

（1）行動理論：段階行動理論（リスク認知→知識→態度→意図→行動）

（2）マーケティング：Segmentation、4Ps (Product]、Price、Place、Promotion)、Prompt, Commitment

個人レベル：（親子会話）

集団レベル：授業（高等学校、中学校）

社会レベル：地域的啓発キャンペーン、マスメディア（TV、新聞、広報）

③ **実施**：標準化（研修会と教材配布）

④ **モニタリング（プロセス評価）**：介入の実施状況の把握

⑤ **効果評価（個人と環境の調査）**：質的調査と量的調査の併用。

（1）質的調査（主にフォーカスグループインタビューを使用、質的分析）。

（2）量的調査（質問紙調査、統計分析）

若者予防グループの2003年度の報告概要

1. A県高校生に対するHIV予防介入研究:WYSH高校生プロジェクト

- 1-①A県高校生のHIV/STD関連知識・意識・行動に関する調査
- 1-②保健所プロジェクト（社会[地域]レベル予防介入）
- 1-③高校生モデル授業プロジェクト（集団[学校]レベル介入）

2. C市中学生に対するHIV予防介入研究:WYSH中学生プロジェクト

- 2-①C市中学生のHIV/STD関連知識・意識・行動に関する調査
- 2-②中学生モデル授業プロジェクト（集団[学校]レベル介入）

1. A県高校生に対するHIV予防介入研究:WYSH高校生プロジェクト

研究の背景および目的

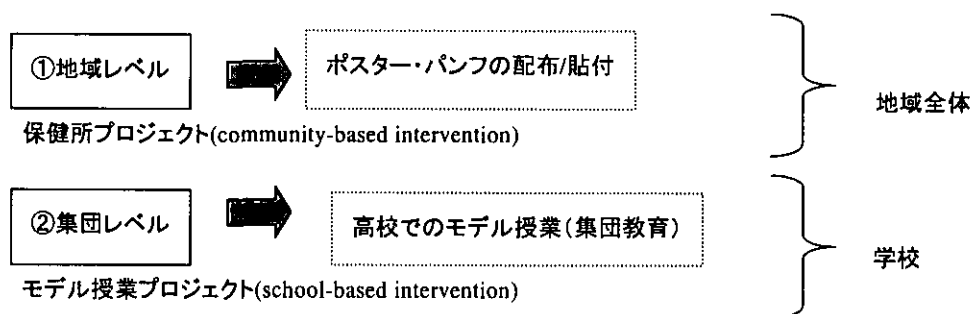
A県の10代女性の人工妊娠中絶率は1995年以降急増をはじめ、また、A県内の産婦人科を受診する妊婦・非妊婦のクラミジア抗原陽性率は全国平均を大きく上回るなど、A県の若者は憂慮すべき状況に置かれている。このような状況に対し、2002年度よりA県高校生を対象とした大規模予防介入研究を開始し、性行動を活発化させることなく予防意識・予防行動が促進するという結果を得ることができた。今年度は、昨年度の予防介入内容をさらに改善し、A県高校生により適した予防教育モデルの開発と、予防介入研究の継続による経年変化を調べる目的で研究を実施した。

研究の特徴

①マルチレベル介入デザイン

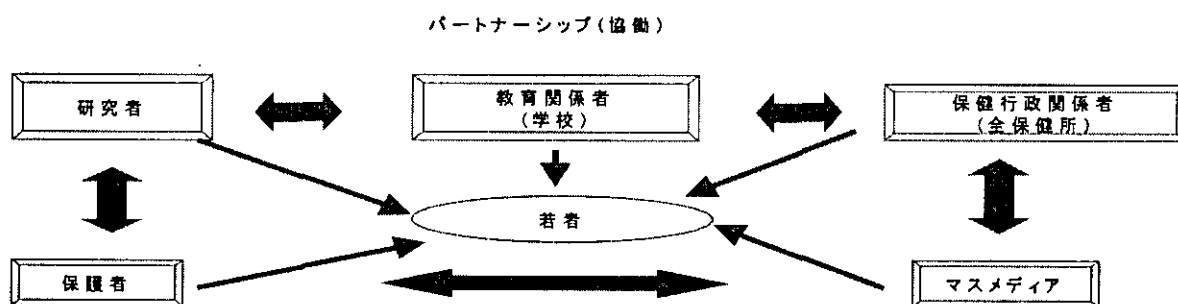
本研究はマルチレベル予防介入研究である。介入は2つのレベル（社会、集団）で行われ、まず、社会レベルとしては、県保健行政との共同で全県的な予防啓発事業（A県の全保健所が参加、保健所プロジェクト）を行い、若者に対する集中的な予防啓発（ポスター・パンフの貼付・配布）を実施した（community-based intervention）。集団レベルとしては、A県全域の高等学校を対象に、生徒全体に対する集団教育を行った（モデル授業プロジェクト、school-based intervention）。

マルチレベル予防介入デザイン



②パートナーシップ(協働)

効果的な予防対策を展開するには、若者（高校生）を取り巻く関係者のパートナーシップが必須となる。本研究では、地方自治体（保健所）、学校、研究者間に対等なパートナーシップが形成され、従来の top-down 的予防対策ではなく、若者を中心に bottom-up 的対策が展開された。

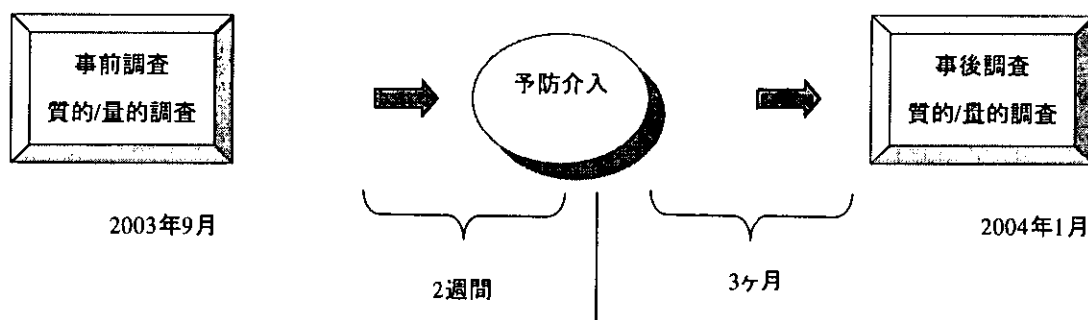


③準実験的研究デザイン

準実験的介入デザインを用い、学校を観測点として、県下全域の予防介入の評価を行った。介入前（2003年9月）と介入後（2004年1月）に質問紙調査（量的調査）とフォーカスグループインタビュー（質的調査）を実施した。介入内容に学校間でかなりの格差が見られたため、最も介入レベルの低い（もしくは無介入の）学校群を比較群として用いた。

準実験的研究デザイン (quasi-experiment)

Pretest and posttest only design with comparison group



1-① A 県高校生の HIV/STD 関連知識・意識・行動に関する調査

調査実施時期：事前調査（2003 年 9 月）-事後調査（2004 年 1 月）

対象：A 県全域の公立（国立 1 校・県立 67 校・市立 1 校）、私立 22 校の全高等学校 91 校の高校 2 年生を対象とした。（但し昨年同様、調査には盲学校・聾学校・養護学校は含まれていない。また学校によっては全学年参加。）

調査の手順：

- ・全対象校の校長あてに調査依頼書セットを送付した。（2003 年 8 月末）

調査依頼書セット

1. 調査依頼文（研究班分担研究者及び A 県エイズ性感染症専門部会委員として）
 2. 各地域の保健所長からの調査依頼文
 3. 調査マニュアル
 4. アンケート用紙（見本）
 5. アンケート諾否の返信用 FAX 用紙
 6. A 県高校生調査/事業評価報告書（2002 年度実施）
 7. 調査報告書の概要（挨拶状）
- ・未回答校に対して督促状送付および電話による依頼（研究班）。
 - ・保健所管内の高等学校へエイズ予防担当官による調査の必要性の説明と依頼

調査方法

無記名自記式質問紙調査、学校における集合調査。調査は試験と同じ要領で実施（記入中は他の生徒と私語禁止。他の生徒の解答用紙は見ないこと。全員が調査終了するまで席を離れないこと）。調査に先立ち、学校関係者により、調査の重要性の説明。

質問紙と調査項目

2001 年度および 2002 年度の質問紙を基に、本年度の質問紙を開発した。2002 年度および 2003 年度質問紙はほぼ同じ内容であるが、昨年の調査結果より無回答や誤解が多いと考えられる設問に対しては改善を加えた。

- (1) **事前調査質問紙：**自記式で 14 ページ、回答所要時間は約 20 分間、主質問 44 問、付問 6 問で。質問紙の構成は、①属性、②家族構成、③家庭・地域・学校での会話頻度、④日常生活、⑤エイズ/性感染症関連知識、⑥性情報への暴露、⑦交友関係、⑧エイズ/性感染症リスク認知、⑨性行動、⑩コンドーム使用や性に対する態度、⑪性モラル、⑫性教育・性情報に対する要望など（資料 1）。
- (2) **事後調査質問紙：**自記式で 14 ページ、回答所要時間は約 20 分間、主質問 36 問、付問 4 問。質問項目の構成は、①属性、②家族との会話頻度、③エイズ/性感染症関連知識、④交友関係、⑤エイズ/性感染症リスク認知、⑥性行動、⑦コンドーム使用や性に対する態度、⑨性モラル、⑩予防啓発への暴露状況など（資料 2）。事前調査の質問紙との違いは、事後調査の質問紙では、事前調査に含まれていた日常生活に関する質問、性情報の暴露に関する質問、性教育に関する質問群が削除され、かわりに予防啓発への暴露状況等を問う質問群が追加されたことである。

倫理的配慮

倫理的配慮として、質問紙の表紙には、匿名性を保つこと、データは統計処理され個人が特定されることはないことを明記した。また、調査開始に際し、この調査は強制でないこと、答えたくなかったら答えなくてもよいこと（白紙の提出可）、記入しなかったことによって成績や学校での評価に影響することはないこと、調査を拒否しても何ら不利益を被らないことを質問紙の表紙に記載し、教員より口頭でも説明した。また、調査終了後は、生徒自身により、添付のカラーシールで封をさせ、学校関係者は内容を見ないことを説明した。

調査参加高等学校

A 県全高等学校、公立（国立 1 校、県立 67 校、市立 1 校：計 69 校）と私立 22 校の合計 91 校に調査を依頼した（今年度の調査には盲聾養護学校は含まれていない）。91 校のうち、事前調査と事後調査の両方に参加した学校は 33 校（公立 23 校/69 校[33.3%]、私立 10 校/22 校[45.5%]）であった。

A 県内は保健医療行政的に 10 地区に区分されているが、地区別の学校の参加率は、地区①（政令都市）29.2%、地区②（政令都市）37.5%、地区③66.7%、地区④50.0%、地区⑤16.6%、地区⑥0%、地区⑦（離島）66.7%、地区⑧（離島）50.0%、地区⑨（離島）0%、地区⑩（離島）0%であった。

調査に参加した生徒総数は、事前調査 5,629 人（男子 2,412 人、女子 3,212 人、不明 5 人）で、事後調査 5,368 人（男子 2,307 人、女子 3,038 人、不明 23 人）で合計 10,997 人であった。参加者の性別学年別内訳を下記に示した（表 1）。

表 1. 参加者の性別・学年別内訳

	事前調査				事後調査			
	全体	男子	女子	不明	全体	男子	女子	不明
全体	5629	2412	3212	5	5368	2307	3038	23
1年生	367	60	306	1	334	48	285	1
2年生	5075	2268	2806	1	4865	2189	2658	18
3年生	165	66	99	0	157	67	90	0
不明	22	18	1	3	10	3	5	4

調査結果

A 県の 2003 年の事前調査結果を 2002 年および 2001 年 A 県調査結果と一部*比較した。但し、A 県の 2001 年調査、2002 年調査および 2003 年の調査では参加校の内訳が異なるため継続参加校に限定した分析も実施した（捕捉資料参照）。（一部*：各調査で使用した質問紙が少しずつ異なっているため比較可能な質問項目だけを比較対象とした。）（2001 年、2002 年度における A 県調査の調査方法については、各年度報告書を参照のこと）

統計学的分析

カテゴリ変数の検定はカイ二乗検定、連続変数の検定については、t 検定及び一元配置分散分析を用いた。計算には、SPSS ver. 12 を使用した。なお、検定は時間の制約上、一部に限定して行い、検定を行ったもののみ、その結果を記載した。また、多重仮説検定は行っていないので、注意が必要である。

(1) 家庭生活

◆家族との会話頻度 (表 2. 表 3)

A 県高校 2 年生男女の家族との会話頻度を尋ねた。「家族とよく話をする」生徒は男子では 59.3%、女子では 81.8%で女子の方が 2 割ほど多かった ($p<0.001$)。昨年度 (2002 年) の調査結果より男女とも 5%程度高くなっていたが傾向は同じであった。また、「よく話をする」相手は、男女とも母親 (男子 91.7%、女子 94.6%) が 90%を超え、兄弟姉妹 (男子 65.3%、女子 66.2%)、父親 (男子 58.6%、女子 45.4%) の順で、父親との会話は男子生徒の方が多く ($p<0.001$)、これらの傾向は昨年度結果と同様であった。

表 2. 家族との日常会話頻度

	2003年				2002年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
まったく話をしない	22	1.0%	10	0.4%	42	1.3	17	0.5
ほとんど話をしない	89	3.9%	49	1.7%	175	5.4	78	2.2
たまに話をする	807	35.6%	447	15.9%	1298	40.2	659	19
よく話をする	1344	59.3%	2296	81.8%	1703	52.7	2714	78.2
不明	6	0.3%	4	0.1%	14	0.4	3	0.1
合計	2268	100%	2806	100%	3232	100	3471	100

表 3. よく話をする相手 (複数回答)

	2003年				2002年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
父	787	58.6%	1043	45.4%	946	55.5	1106	40.8
母	1232	91.7%	2173	94.6%	1538	90.3	2498	92.0
兄弟姉妹	877	65.3%	1519	66.2%	1106	64.9	1754	64.6
祖父母	260	19.3%	422	18.4%	269	15.8	307	11.3
その他	20	1.5%	48	2.1%	41	2.4	40	1.5
	n=1344	100%	n=2806	100%	n=1703	100%	n=2714	100%

◆男女交際に関する会話経験 (表 4)

次に男女交際について家族と話した経験を尋ねた。男女交際について話した経験は男子で 37.7%、女子では 60.0%と女子の方が 2 割以上も高く ($p<0.001$)、男女交際に関する家族の態度が男女で大きく差があることが示された。

表 4. 男女交際について話をしたことがある人の割合

	男子		女子	
	人数	%	人数	%
ある	855	37.7%	1684	60.0%
ない	1393	61.4%	1101	39.2%
不明	20	0.9%	21	0.7%
合計	2268	100%	2806	100%

◆家族との会話頻度と性規範との関係（表5、表6）

家族との日常会話頻度と性規範（中学生がセックスすることを構わないと思っている生徒の割合、高校生がセックスすることを構わないと思っている生徒の割合）の関係を見ると、（他の因子との交絡の可能性は否定できないが）、例えば、中学生のセックスを容認している生徒の割合は、会話を「よくする」生徒では、容認率が32.5%であるのに対し、その容認率は会話頻度が減少するにつれて上昇し、「全く話をしない」生徒では65.6%の容認率で、男女とも会話頻度とセックスの容認度との間には逆相関が観察された（ $p<0.001$ ）。高校生のセックス容認率に関しても全く同じ傾向が見られた。

表5. 家族との会話頻度別中学生のセックス受容度

	男子	%	女子	%	全体	%
全く話をしない	12	54.5	9	90.0	12	65.6
ほとんど話をしない	40	44.9	21	42.9	61	44.2
たまにはなしをする	374	46.3	147	32.9	521	41.5
よく話をする	551	41.0	630	27.4	1181	32.5

表6. 家族との会話頻度別高校生のセックス受容度

	男子	%	女子	%	全体	%
全く話をしない	16	72.7	9	90.0	25	78.1
ほとんど話をしない	49	55.1	27	55.1	76	55.1
たまにはなしをする	478	59.2	226	50.6	704	56.1
よく話をする	735	54.7	1064	46.3	1800	49.4

◆家族との会話頻度と性経験率との関係（表7）

さらに、家族との日常会話頻度と実際の性経験率との関係を見ると、（他の因子との交絡の可能性は否定できないが）男女とも家族との会話頻度が減少するにつれて、性経験率が上昇し、家族との日常会話頻度と性経験率との間には、前述の性規範との関係と同様に逆相関の関係が見られた（ $p<0.001$ ）。また、昨年度（2002年）の調査結果でも同様の傾向が観察されている。

表7. 家族との会話頻度とセックスの経験率との関係

	2003年				2002年			
	男子	性経験者	女子	性経験者	男子	性経験者	女子	性経験者
全体	2268	559	2806	947	3232	795	3471	1086
	%	25.1	100	33.7	%	24.6	100	31.3
まったく話をしない	22	9	10	5	42	16	17	7
	%	40.9	100	50.0	%	38.1	100	41.2
ほとんど話をしない	89	23	48	25	175	55	78	35
	%	25.8	100	51.0	%	31.4	100	44.9
たまに話をする	807	200	435	172	1298	306	659	230
	%	24.8	100	38.5	%	23.6	100	34.9
よく話をする	1344	326	2263	744	1703	413	2714	812
	%	24.3	100	32.4	%	24.3	100	29.9

(2) 学校生活

◆学校の先生との雑談頻度（表 8）

男女を比較すると、女子の方が先生との会話頻度が高い傾向が得られた ($p<0.001$)。全体では、先生と「たまに話をする」生徒が最も多く、約半数を占めていた。先生と「よく話をする」生徒は男子 5.2%、女子 10.4%と少数であり、先生と「まったく話をしない」生徒が約 1 割も存在した。

表8. 学校の先生との会話頻度

	男子	%	女子	%
まったく話をしない	271	11.9%	227	8.1%
挨拶をするだけ	847	37.3%	846	30.1%
たまに話をする	1029	45.4%	1438	51.2%
よく話をする	117	5.2%	291	10.4%
不明	4	0.2%	4	0.1%
合計	2268	100%	2806	100%

◆保健室利用頻度（表 9）

過去 3 ヶ月間の保健室利用頻度を尋ねた。過去 3 ヶ月間、女子の 4 割、男子の 3 割は少なくとも 1 回は保健室を利用しており（男女差 $p<0.001$ ）、中でも週 1 回以上の頻回来室者は女子の 4.8%、男子 3.0%であった。昨年度調査結果より、保健室来室頻度とリスクの高い性行動との間には相関関係が見られることから（平成 14 年度報告書参照）、これら頻回来室者に対する教育の必要性が示唆された。

表9. 保健室利用頻度

	男子	%	女子	%
まったく行かなかった	1497	66.0	1519	54.1
3ヶ月に1回くらい	440	19.4	694	24.7
月1回	152	6.7	234	8.3
月2-3回くらい	105	4.6	220	7.8
週1回	31	1.4	49	1.7
週2-3回くらい	27	1.2	62	2.2
週4回以上	10	0.4	25	0.9
不明	6	0.3	3	0.1
合計	2268	100.0	2806	100.0

◆養護教諭との会話頻度（表 10）

保健室来室時の養護教諭との会話頻度を尋ねた。養護教諭と「よく話をした」+「わりと話をした」生徒の割合は、女子の 22.8%、男子の 16.4%と 2 割近くに上った ($p<0.001$)。

表10. 養護教諭との会話

	男子	%	女子	%
よく話をした	84	3.7	203	7.2
わりと話をした	288	12.7	438	15.6
たまに話をした	327	14.4	514	18.3
めったに話さなかった	383	16.9	550	19.6
保健室には行かなかった	1103	48.6	1025	36.5
不明	83	3.7	76	2.7
合計	2268	100.0	2806	100.0

(3)日常生活

◆近所の大人との会話頻度(表 11)

地域社会との関わりを調べる目的で、近所の大人との会話頻度を尋ねた。最も多かったのは、近所の大人と「挨拶をするだけ」の関わりで全体の約半数を占め、「たまに話をする」高校生は約3割、「全く話をしない」高校生が1割程度存在し、近所の大人と「よく話をする」は数%にとどまった。

表11. 近所の大人との会話頻度

	男子	%	女子	%
まったく話をしない	278	12.3%	273	9.7%
挨拶をするだけ	1187	52.3%	1476	52.6%
たまに話をする	745	32.8%	954	34.0%
よく話をする	57	2.5%	100	3.6%
不明	1	0.0%	3	0.1%
合計	2268	100%	2806	100%

◆喫煙経験と飲酒経験(表 12、表 13)

A 県高校2年生の喫煙経験と飲酒経験を尋ねた。喫煙では男子の44.9%、女子の23.7%が喫煙経験があり(男女差 $p < 0.001$)、毎日喫煙している生徒は男子12.3%、女子2.9%(男女差 $p < 0.001$)で、昨年(2002年)の報告とほぼ同じであった。飲酒では、男子の75.9%、女子の71.6%が飲酒経験があり(男女差 $p < 0.001$)、「たまに飲む」人は男子の36.5%、女子の38.3%にもものぼり、毎週飲酒している生徒が男子3.6%、女子1.9%であった。これらの喫煙習慣、飲酒習慣を昨年度(2002年)と比較すると、喫煙習慣は昨年とほぼ同じ傾向であるが、飲酒習慣では、「たまに飲む」人の割合が昨年よりも10~15%も上昇していた(男女とも $p < 0.001$)。

表 12. 喫煙習慣

	2003年				2002年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
すったことがない	1242	54.8	2132	76.0	1760	54.5	2604	75.0
すったことがある	604	26.6	492	17.5	902	27.9	635	18.3
たまにすう	135	6.0	92	3.3	171	5.3	93	2.7
よくすう(毎日)	280	12.3	82	2.9	378	11.7	121	3.5
不明	7	0.3	8	0.3	21	0.6	18	0.5
合計	2268	100	2806	100	3232	100	3471	100

表 13. 飲酒習慣

	2003年				2002年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
のんだことがない	541	23.9	792	28.2	595	18.4	757	21.8
のんだことがある	813	35.8	880	31.4	1612	49.9	1817	52.3
たまにのむ	827	36.5	1074	38.3	893	27.6	809	23.3
よく飲む(毎週)	81	3.6	54	1.9	119	3.7	73	2.1
不明	6	0.3	6	0.2	13	0.4	15	0.4
合計	2268	100	2806	100	3232	100	3471	100

◆各種経験(表 14)

その他の経験では、「出会い系サイト」利用者が男子 10.9%、女子 14.3%と男女とも 1 割以上の生徒が利用の経験を持っていた。「テレクラ」利用者は男子 0.8%、女子 3.3%で、「援助交際」経験者は男子 0.3%、女子 2.0%で、いずれも男子よりも女子の経験者の割合が高かった(いずれも、男女差 $p < 0.001$)。また、各種薬物(大麻・スピード・シンナー)利用者も全て 1%以下であるが男女とも存在した。これらの結果は昨年度(2002 年)の調査結果とほぼ同様の傾向を示した

表 14. 各種経験

	2003 年				2002 年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
テレクラ	17	0.8	91	3.3	55	1.7	190	5.5
出会い系サイト	240	10.9	394	14.3	423	13.1	517	14.9
援助交際	7	0.3	56	2.0	11	0.3	46	1.3
大麻・ハッシ・ハッパ	8	0.4	2	0.1				
スピード・S	3	0.1	0	0	10	0.3	3	0.1
シンナー	25	1.1	10	0.4	32	1.0	6	0.2
どれも経験がない	1940	87.7	2312	83.8	2593	80.2	2708	78.0
	n=2268		n=2806		n=3232		n=3471	

◆各種経験と性行動との関係(表 15)

上記の各種経験を持つ人の性行動とこれらの経験を持たない人と比較した(A 県高校 2 年生男女を合わせたもの)。まず、性経験率は、上記経験を持たない人では 24.6%であるのに対し、上記経験者では、58%~100%の高い性経験率が示された($p < 0.001$)。その性経験者における性行動を見ると、これまでのセックスの相手が 4 人以上の人の割合は、上記経験のない人では 12.3%であるのに対し、上記経験者では 38%~100%と高い値であった(表中「どれも経験がない」群とそれ以外をまとめた群との差は、 $p < 0.001$)。上記の各種経験者群は割合としては低率ではあるが、性経験者が多く、リスクの高い性行為が行なわれていることが示され、性感染症予防の観点からも特に考慮すべき対象であると考えられた。

表 15. 各種経験者と性行動との関係(男女 2003 年)

	合計	性経験者	4人以上相手がいた人
全体	5075	1506	294
		29.7	19.5
出会い系サイト	634	369	139
		58.2	37.7
テレクラ	108	66	34
		61.1	51.5
援助交際	63	55	41
		87.3	74.5
ハッシ・ハッパ	10	9	7
		90.0	77.8
スピード	3	3	3
		100.0	100.0
シンナー	35	25	16
		71.4	64.0
どれも経験がない	4253	1046	129
		24.6	12.3

(4) エイズ/性感染症関連知識の正解率 (表 16)

エイズ/性感染症関連知識の正解率を調べた。若者の間でエイズ/性感染症が増加していることは、高校2年生の7~9割が知っていた。また、エイズの感染経路などの基礎知識も7~8割の生徒が正解であったが、エイズ検査に関する質問や一般の性感染症に関する知識の正解率は3~4割と低く、自分自身の感染を知る方法やより身近な性感染症の知識が十分でないことが示された。また、男女で比較すると、4問を除きほとんどの設問で女子の正解率が高く、最も差が大きい質問では、女子の方が20%以上も正解率が高かったことから、実際の性行為の場面で主に主導権をとると考えられる男子の知識レベルを上げる必要性が示唆された。さらに、これら介入前に高校2年生の知識レベルを今年度と昨年度(2002年)の調査結果を比較すると、ほとんどの設問では正解率は微増であったが、A県地元固有の疫学情報に関する知識だけは、15~20%も上昇しており ($p<0.001$)、昨年来のA県全体での地域ぐるみの予防啓発活動が影響を与えている可能性が示唆された。

表 16. AIDS/STD 関連知識の正解率

	2003 年		2002 年	
	男子% (n=2268)	女子% (n=2806)	男子% (n=3232)	女子% (n=3471)
若者 HIV 増加	71.1	77.8	70.0	72.5
若者 STD 増加	77.1	86.1	78.2	83.5
長崎中絶増加	60.4	79.2	45.6	57.0
クラミジアは性病	46.3	56.5	45.9	49.7
長崎はクラミジア高	25.7	30.0	12.9	16.7
HIV は食器からうつる	65.7	79.3	70.0	78.0
HIV はお風呂でうつる	65.9	70.8	69.3	70.6
HIV と STD 相互作用	25.0	26.6	22.6	21.9
口~性器に STD	28.1	24.8	21.4	19.7
性器から口に STD	38.9	41.3	32.2	33.2
STD は必ず有症状	31.7	43.0	31.3	36.1
STD は不妊の原因	45.9	57.1	38.1	46.2
STD は子宮癌原因	27.3	28.0	23.0	20.9
新薬で AIDS 発症遅延	28.2	35.8	28.4	32.7
感染後数日で感染判明	19.4	31.7	23.8	28.8
HIV 陽性者の個人情報報告義務	29.7	36.6	28.2	36.4
保健所無料匿名検査	35.4	33.8	34.7	35.7
他の地域の保健所で検査可能	28.1	24.6		
コンドームは HIV/STD 予防可能	86.6	87.0	88.4	88.3
ピルは避妊薬	71.9	80.8	73.8	82.1
ピルで HIV・STD 予防	45.1	52.7	42.3	42.9
膈外射精は避妊効果なし	45.2	53.3	42.9	48.4
安全日の避妊効果なし	55.4	81.1	48.3	71.4

(5) 性情報

◆セックスがどういうことをする行為かいつ知ったか？ (表 17)

表 17 には、「セックスがどういうことをする行為かいつ知ったか？」の結果を示す。知った割合が最も多かった学年は男女とも中学 1 年生で男子 29.8%、女子 20.5%であった (男女差 $p<0.001$)。小学校時代に既に知っていた児童の割合を昨年度と今年度を比較すると、男子では 2002 年 47.8%、2003 年 43.8%、女子では 2002 年 66.3%、2003 年 54.1%と、昨年度に比べ今年度は男女とも小学校までに知っていた生徒の割合は減少していた ($p<0.001$)。

表 17. セックスの意味をいつ知ったか。

	2003 年				2002 年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
小 1	35	1.5	42	1.5	132	4.1	178	5.1
小 2	36	1.6	46	1.6	101	3.1	159	4.6
小 3	67	3.0	129	4.6	144	4.5	243	7.0
小 4	131	5.8	298	10.6	242	7.5	384	11.1
小 5	333	14.7	562	20.0	536	16.6	727	20.9
小 6	391	17.2	443	15.8	389	12.0	611	17.6
中 1	676	29.8	574	20.5	789	24.4	557	16.0
中 2	366	16.1	346	12.3	369	11.4	292	8.4
中 3	74	3.3	93	3.3	82	2.5	79	2.3
高 1	23	1.0	51	1.8	37	1.1	36	1.0
高 2	14	0.6	10	0.4	8	0.2	7	0.2
高 3	5	0.2	0	0.0	3	0.1	0	0.0
高 4	4	0.2	1	0.0				
不明	113	5.0	211	7.5	73	2.3	198	5.7
合計	2268	100	2806	100	3232	100	3471	100

◆はじめてセックスについて知ったのは誰（何）から？（表 18）

はじめての性情報は生涯の性行動に大きな影響を及ぼすと言われているが、表 18 に、「セックスについてはじめて知ったのは誰（何）からか？」の結果を示す。多い順に上位 5 位を示すと、男子生徒では、同性の友達（65.2%）、保健体育の先生（23.4%）、マンガ（22.9%）、雑誌・週刊誌（17.5%）、アダルトビデオ（16.7%）であり、女子生徒では、同性の友達（44.0%）、保健体育の先生（34.9%）、マンガ（31.5%）、テレビドラマ（27.0%）、養護の先生（25.7%）であった。今年度の調査結果を昨年度と比較すると、順序が若干入れ替わるものの、上位 5 位の項目は同じであり、男子では同性の友達、マンガ、保健体育の先生、雑誌・週刊誌、アダルトビデオで、女子では同性の友達、保健体育の先生、マンガ（19.9%）、テレビドラマ、養護の先生であった。特に 5% 以上の変化のあった項目は、女子におけるマンガ利用で、昨年度 26.5% から今年度 31.5% に増加していた（ $p < 0.001$ ）。

表 18.セックスについて最初に知ったのは誰からか（複数回答）

	2003 年				2002 年			
	男	%	女	%	男	%	女	%
男の友達	1479	65.2	506	18.0	2052	63.5	516	14.9
女の友達	101	4.5	1234	44.0	167	5.2	1413	40.7
彼氏や彼女	36	1.6	86	3.1	47	1.5	98	2.8
養護の先生	175	7.7	720	25.7	188	5.8	775	22.3
保健体育の先生	531	23.4	978	34.9	727	22.5	1255	36.2
家庭科の先生	38	1.7	99	3.5	78	2.4	83	2.4
担任の先生	131	5.8	231	8.2	211	6.5	333	9.6
医師・看護師・研究者など専門化	8	0.4	18	0.6	15	0.5	27	0.8
兄	36	1.6	24	0.9	74	2.3	25	0.7
姉	6	0.3	36	1.3	10	0.3	50	1.4
父	21	0.9	38	1.4	34	1.1	66	1.9
母	17	0.7	112	4.0	34	1.1	160	4.6
親戚の人	30	1.3	32	1.1	36	1.1	31	0.9
テレビのニュース	82	3.6	96	3.4	80	2.5	109	3.1
テレビのドラマ	269	11.9	758	27.0	395	12.2	869	25.0
テレビの特集番組	104	4.6	117	4.2	201	6.2	159	4.6
アダルトビデオ	379	16.7	114	4.1	548	17.0	130	3.7
新聞	35	1.5	15	0.5	40	1.2	24	0.7
雑誌・週刊誌	397	17.5	405	14.4	593	18.3	463	13.3
漫画	519	22.9	885	31.5	744	23.0	919	26.5
専門書	40	1.8	20	0.7	68	2.1	42	1.2
インターネット	32	1.4	20	0.7	23	0.7	4	0.1
その他	38	1.7	49	1.7	57	1.8	43	1.2
特にない	96	4.2	120	4.3	132	4.1	153	4.4
不明	58	2.6	87	3.1	102	3.2	179	5.2
	n=2268		n=2806		n=3232		n=3471	

◆小学校時代の性情報への暴露状況（表 19）

表 19 に、小学校時代の性メディアへの暴露状況を示す。性描写のあるマンガへの暴露は男子 39.3%、女子 27.4%と 3～4 割を占め、性描写のある雑誌の暴露は男子の 32.5%、女子の 17.9%と 2～3 割で、アダルトビデオへの暴露は男子の 17.6%、女子の 6.6%であった（いずれも男女差 $p<0.001$ ）。この結果を、A 県の昨年度の結果と比較すると、インターネットを除く全項目で男子ではすべて曝露率がやや減少傾向を示した（ $P>0.2$ ）していたのに対し、女子では全てやや増加傾向を示した（ $p>0.1$ ）。

表 19. 小学校時代の性メディアへの曝露率

	2003 年				2002 年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
全体	2268	100	2806	100	3232	100	3471	100
エッチ漫画	892	39.3	769	27.4	1321	40.9	897	25.8
エッチ雑誌	736	32.5	502	17.9	1098	34.0	579	16.7
アダルトビデオ	399	17.6	184	6.6	617	19.1	210	6.1
インターネット	31	1.4	7	0.2	41	1.3	9	0.3

(6) 交際状況（表 20） 交際相手（表 21）

高校 2 年生の交際状況を表 20 に示した。一度も交際経験のない人は、調査年度にかかわらず、男子の約 4 割、女子の約 3 割であった（男女差 $p<0.001$ ）。また、現在、交際相手のいる人は、男子の約 2 割、女子の約 3 割であった（男女差 $p<0.001$ ）。この結果は、A 県の前年度結果でも同様の傾向が観察された。

表 20. 現在の交際状況

	2003 年				2002 年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
今まで誰ともつきあったことない	888	39.2	869	31.0	1225	37.9	1091	31.4
以前はいたが、今はいない	881	38.8	1094	39.0	1270	39.3	1311	37.8
現在、つきあっている	483	21.3	823	29.3	674	20.9	997	28.7
不明	16	0.7	20	0.7	63	1.9	72	2.1
合計	2268	100	2806	100	3232	100	3471	100

交際相手は、男子の 9 割、女子の 7 割は同じ高校生であった。交際相手のうち、大学生、社会人など年上と交際している人の割合は男子では 4.3%であったが、女子では 24.8%と全体の 4 分の 1 も存在しており（男女差 $p<0.001$ ）、高校生集団以外のネットワークとのつながりが観察された。昨年度との比較では、男女ともほぼ同様の傾向が観察された。

表 21. 交際相手

	2003 年				2002 年			
	男	%	女	%	男	%	女	%
中学生以下	9	1.9	0	0	13	1.9	2	0.2
高校生	449	93.0	598	72.7	602	89.3	706	70.8
フリーター	7	1.4	30	3.6	16	2.4	47	4.7
大学生	6	1.2	31	3.8	8	1.2	36	3.6
社会人	8	1.7	143	17.4	15	2.2	174	17.5
その他	2	0.4	18	2.2	5	0.7	16	1.6
不明	2	0.4	3	0.4	15	2.2	16	1.6
全体	483	100	823	100	674	100	997	100

(7)性行動

◆セックス経験率 (表 22)

高校2年生のセックスの経験率を表22に示した。A県の高校2年生のセックスの経験率は男子24.6%、女子33.7%であり(男女差 $p<0.001$)、調査に参加したA県高校2年生の2~3割の生徒がセックスの経験を持っていた。さらに性経験率の2001年度、2002年度、2003年度の調査結果を比較すると、男子は3年間25%程度で全く変化がないのに対し、女子では27%、31%、34%と年々、経験率の増加が観察され、女子の性行動の活発化の傾向はまだ継続している様子がうかがわれた ($p<0.001$)。

表 22. セックスの経験率 (高校2年生)

	2003年				2002年				2001年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
ある	559	24.6	947	33.7	795	24.6	1086	31.3	560	24.8	726	27.1
ない	1664	73.4	1813	64.6	2376	73.5	2298	66.2	1641	72.6	1865	69.7
不明	45	2.0	46	1.6	61	1.9	87	2.5	59	2.6	84	3.1
合計	2268	100	2806	100	3232	100	3471	100	2260	100	2675	100

◆初交年齢 (表 23)

高校2年生までにセックスを経験している男女の初交年齢を見ると、セックス経験者の7割近く(男子の71.1%、女子の74.3%)が15歳~16歳(高校1年生/高校2年生)でセックスを経験しており、高校入学後のセックスの開始がその大半を占める。また、A県高校2年生の初交年齢の平均値を2001年、2002年、2003年で比較すると、2001年男子15.4±2.2歳、女子15.4±2.5歳、2002年男子14.9±2.4歳、女子14.7±3.2歳、2003年男子14.4±3.5歳、女子14.6±3.4歳と男女とも年々初交年齢が早期化していることが示された(男女とも一元配置分散分析で、 $p<0.001$)。

表 23. はじめてのセックスは何歳の時

	2003年				2002年				2001年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
12歳以下	9	1.6	10	1.1	18	2.3	19	1.7	8	1.4	5	0.7
13歳	22	3.9	34	3.6	29	3.6	26	2.4	14	2.5	16	2.2
14歳	81	14.5	97	10.2	97	12.2	106	9.8	45	8.0	48	6.6
15歳	201	36.0	353	37.3	292	36.7	369	34.0	135	24.1	187	25.8
16歳	196	35.1	350	37.0	299	37.6	447	41.2	245	43.8	306	42.1
17歳以上	21	3.8	58	6.1	47	5.9	74	6.8	104	18.6	149	20.5
不明	29	5.2	45	4.8	13	1.6	45	4.1	9	1.6	15	2.1
合計	559	100	947	100	795	100	1086	100	560	100	726	100

◆初交時のコンドーム使用率(表 24)

初交時のコンドーム使用率を尋ねた。男子の 69.2%、女子の 66.0%と約 7 割が初交時にコンドームを使用していた。この結果を昨年と比較すると、昨年に比べ初交時のコンドーム使用率が男女とも約 8%上昇しており(男女差 $p < 0.001$)、予防意識が促進された可能性が示唆された。

表 24. 初めてのセックスの時のコンドーム使用状況

	2003 年				2002 年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
使った	387	69.2	625	66.0	489	61.5	624	57.5
使わなかった	159	28.4	289	30.5	285	35.8	406	37.4
わからない	6	1.1	21	2.2	10	1.3	32	2.9
不明	7	1.3	12	1.3	11	1.4	24	2.2
合計	559	100	947	100	795	100	1086	100

◆これまでのセックスの相手の総数(表 25)

セックスの経験を有する生徒にこれまでの相手の総数を尋ねた。表 25 にこれまでの相手の累積数を示す。男女とも、これまでの相手が一人の生徒は既に半数を切っており、4 人以上の相手がいる生徒が男女とも 2 割も存在した。相手の累積数が 2 人以上の割合の年次推移を見ると、2001 年男子 51.6%、女子 51.7%、2002 年男子 52.1%、女子 51.6%、2003 年男子 50.8%、女子 50.5%で、男女とも約半数が 2 人以上の相手を持ち、相手の数がわずかに減少傾向を示していた。

表 25. これまでのセックスの相手の総数

	2003 年				2002 年				2001 年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
1 人	247	44.2	423	44.7	342	43.0	453	41.7	257	45.9	327	45.0
2 人	121	21.6	184	19.4	167	21.0	222	20.4	101	18.0	148	20.4
3 人	54	9.7	110	11.6	110	13.8	117	10.8	74	13.2	95	13.1
4 人以上	109	19.5	185	19.5	137	17.2	221	20.3	114	20.4	132	18.2
不明	28	5.0	45	4.8	39	4.9	73	6.7	14	2.5	24	3.3
合計	559	100	947	100	795	100	1086	100	560	100	726	100

◆過去 3 ヶ月間のコンドーム使用状況(表 26)

過去 3 ヶ月のコンドーム使用状況を表 26 に示す。過去 3 ヶ月間、コンドームを毎回使っている人の割合は、2002 年男子 30.9%、女子 28.7%が、2003 年には男子 39.4%、女子 35.8%と男女とも 7~8%も上昇しており(男 $P = 0.01$ 、女 $P < 0.01$)、予防意識が高まっている可能性が示唆された。

表 26. 過去 3 ヶ月間のコンドーム使用状況

	2003 年				2002 年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
一度も使わなかった	48	14.1	100	15.1	83	16.2	150	19.2
使わない方が多かった	38	11.2	102	15.4	68	13.3	137	17.6
半々だった	52	15.3	112	16.9	86	16.8	123	15.8
使う方が多かった	67	19.7	107	16.1	111	21.7	140	17.9
毎回使った	134	39.4	238	35.8	158	30.9	224	28.7
不明	1	0.3	5	0.8	5	1	6	0.8
合計	340	100	664	100	511	100	780	100

◆過去3ヶ月間のコンドーム使用意図(表27)

表27に過去3ヶ月間のコンドーム使用意図を示す。「毎回使おうと思った」人の割合は2002年男子36.8%、女子42.7%であったが(男女差 $p<0.05$)、2003年には男子44.1%、女子46.5%と、コンドーム使用率同様、4~7%コンドームの使用意図が上昇し、約半数近くは毎回コンドームを使おうと思っていることが示された(男 $p<0.05$ 、女 $p=0.09$)。(但し、実際に毎回使用しているのはこれよりも5~10%くらい低い[表26])

表27. 過去3ヶ月間のコンドーム使用意図

	2003年				2002年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
全く思わなかった	30	8.8	38	5.7	52	10.2	73	9.4
思わないことが多かった	27	7.9	51	7.7	58	11.4	89	11.5
半々だった	53	15.6	113	17	94	18.4	135	17.4
思うときが多かった	76	22.4	137	20.6	113	22.1	141	18.1
毎回思った	150	44.1	309	46.5	188	36.8	332	42.7
不明	4	1.2	16	2.4	6	1.2	7	0.9
合計	340	100	664	100	511	100	777	100

◆過去3ヶ月のコンドーム使用交渉(表28)

表28に過去3ヶ月にコンドーム使用交渉状況を尋ねた。過去3ヶ月間「毎回コンドーム使おうと言った」人の割合は、男子33.8%、女子33.4%と約3割強が毎回口に出して使用を促していた。この結果を昨年と比較すると、「毎回使おうと言った」人の割合は昨年に比べ男女とも6~10%も増加していた(男 $p=0.002$ 、女 $p=0.01$)。

表28. 過去3ヶ月間のコンドーム交渉

	2003年				2002年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
全く言わなかった	74	21.8	156	23.5	122	23.9	205	26.4
言わないことが多かった	37	10.9	75	11.3	75	14.7	99	12.7
半々だった	48	14.1	104	15.7	78	15.3	122	15.7
言うことが多かった	61	17.9	94	14.2	112	22.0	128	16.5
毎回言った	115	33.8	222	33.4	121	23.7	215	27.7
不明	5	1.5	13	2.0	13	2.5	8	1.0
合計	340	100	664	100	511	100	777	100

◆コンドーム使用目的 (表 29)

コンドームの使用目的を表 29 に示す。男女ともほとんど (男子 95.6%、女子 94.1%) が避妊を目的としていた。性感染症予防を目的とする生徒は男子 32.4%、女子 26.8%で、エイズ予防を目的とする人は男子 27.1%、女子 21.4%で (男女差はいずれも $p>0.1$)、全体では 2～3 割で性感染症予防の方がエイズ予防よりも約 5%多かった (男 $p>0.1$ 、女 $p=0.02$)。この結果を昨年の結果とほぼ同じ傾向を示した。

表 29. コンドーム使用目的(複数回答)

	2003 年				2002 年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
避妊	325	95.6	625	94.1	467	91.4	725	93.3
エイズ予防	92	27.1	154	21.4	156	30.5	159	20.5
性病予防	110	32.4	192	26.8	173	33.9	208	26.8
その他	11	3.2	4	0.6	11	2.2	8	1.0
合計	n=340		n=664		n=511		n=777	

◆一番最近のセックス時のコンドーム使用率 (表 30)

一番最近のセックス時のコンドーム使用率は男子 65.0%、女子 61.9%の人がコンドーム使用していた。この結果を昨年と比較すると、昨年度より 5～8%使用率が上昇し、女性での上昇は有意であった (男 $p=0.25$ 、女 $p=0.02$)、つまり「初交時のコンドーム使用率」「過去 3 ヶ月のコンドーム毎回使用」「一番最近のセックス時のコンドーム使用」いずれの切り口で見ても、昨年度よりも今年度の方が、学校での介入以前のベースラインの時点で既にコンドーム使用率が上昇していたことになる。

表 30. 一番最近のセックスの時のコンドーム使用状況

	2003 年				2002 年			
	男子	%	女子	%	男子	%	女子	%
使った	221	65.0	411	61.9	309	60.5	417	53.7
使わなかった	111	32.6	241	36.3	181	35.4	335	43.1
わからない	7	2.1	8	1.2	14	2.7	16	2.1
不明	1	0.3	4	0.6	7	1.4	9	1.2
合計	340	100	664	100	511	100	777	100